The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 寺村秀夫先生の思い出 |
| Author(s) | 玉村, 文郎 |
| Citation | 阪大日本語研究. 1991, 3, p. 1-10 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/10659 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 寺村秀夫先生の思い出
## Memories of Professor Teramura Hideo

玉　村　文　郎
TAMAMURA Fumio

みなさん，こんにちは。

今日は，今少し気温が下がりましたけれども，昼過ぎまで大変暑うございました。寺村先生のこのお写真は，丁度，あの日本語教育学会の学会ニュースに載っておりました写真と原版は一緒だろうと思います。寺村先生はよく汗をおかきでして，しょっちゅうハンケチで，こう，額をぬぐっておられたという記憶がございますが，この写真，やはり，あの，心なしか私にはおでこのあたりに，ちょっと汗がにじみ出ているように思えます。

今日，私が，この場で皆様に寺村先生の思い出を語るということになりましたのは，大阪大学の先生方の強い慫慂によるものであります。不適任を承知しつつも，長い寺村先生とのおつき合いを通じてのその思い出を語ろう，ということで，今日，皆様の前に立つことになった次第でございます。

お話の中で，寺村先生と言ったり，寺村さんと言ったりすることがあるかと思いますが，どうぞお許し下さいますようにお願いします。

寺村先生は，1965年から，大阪外国語大学にいらっしゃったわけですが，私が一番最初に寺村先生にお目にかかったのは，その翌年，1966年の12月でございました。丁度，大阪外国語大学の中国語学の先生とお話をすることがありまして，その先生の研究室に行っておりましたら，今，そんな話に関心のある方を呼ぶから，ということで，会議中だったそうなんですけれども，寺村先生が，私の話が終わったところにお見えになりました。この時が，先生との初対面でした。私自身は，1967年，大阪外国語大学の方

に非常勤で留学生別科の仕事をお手伝いに行くことになり，翌年，68年から寺村先生と同じ朋輩として，留学生別科の専任として勤めることになりました。大阪大学にいらっしゃいます佐治先生は，確か，その１年前から，同じく留学生別科にお勤めだったと思います。

当時，寺村先生，それから，佐治先生，それから私は留学生別科の中で，言語派とでも言いますか，まあ，言葉のことを専門にやっておりましたものですから，いろんなことでお話をすることが多うございました。私自身は，言葉一般をやっておりましたけれども，先にいらっしゃいました寺村先生が，まあ，先程お話がありましたように，文法のことをいろいろお考えでございました。それから，佐治先生も国文法の方をずっと研究なさっていらっしゃいました。

それから数年後に，当時は文化庁の所管でありましたが，大阪で日本語教育のための現職者研修というのを始めるということで，大阪外国語大学が当番校になりまして，私どもが講師をお引き受けすることになりました。

その際に，外大のメンバーが講習を分担することになりまして，寺村先生，佐治先生が文法をなさいますので，私は残った部分を担当するということで，時に音韻になったり，文字になったりいたしました。あとは段々語彙に固まって参りました。そういう経緯で３人がいろいろ分野を選びながら研究・教育の活動を進めて参りました。今日，こうして私が，寺村さん，寺村先輩の思い出を語るということは，本当に胸のつまる思いでございます。少し古い歌でございますけれども，「ここはお国を何百里」で始まる真下飛泉の歌がございます。あの中に，「友の塚穴掘ろうとは」という一句がありますが，本当にそういう気持ちがいたします。

私が着任いたしましてすぐでございましたけれども，寺村先生が文部省の在外研究員としてアメリカ合衆国のカンザスに，日本語を教えに行かれ，そして，言語の研究にも携わられるということになりました。御渡米前の初夏の頃，寺村先生が廊下を歩いていらっしゃるのを見ますと，時々，アロハを着て廊下をパーッと通られるのですが，これが，またとっても様になっていまして，さすがハワイで過ごされた方だと思いました。私なんか

もそういうものを着たことがあるんですけれども，寺村先生が着ていらっしゃいますと，本当に自然な感じでして，よくうつりました。留学生別科の事務官たちとも，寺村さんやっぱりあちら仕込みだから板についてる，なんて言って，おうわさを申しました。

この頃から，寺村先生は2年間にわたってカンザスで過ごされましたが，丁度，その寺村先生の外遊の時に，1970年をピークにして，日本全体の大学が学生運動で荒れるということがございまして，寺村先生はそれを異国からながめられるという立場にいらっしゃいました。私どもの大学は，そんなにひどい荒れ方ではなかったんですけれども，それでも留守をしていた者にとっては，いろんな辛い経験がございました。

この近くの南千里に，通産省関係の特殊法人である海外技術者研修協会関西研修センターというのがありまして，そこで，寺村先生は日本語を教えているスタッフたちの相談にのったり，新しい教材の編集をする時のアドバイスをしたりなさっていらっしゃいました。

寺村先生が渡米される時に，先生の代わりを私が引き受けることになり，時々関西研修センターに通うことになりました。このことは寺村先生と私を結びつける一層大きな絆になったと思います。私個人としても，ここでは随分多くのことを教えられました。大学院入学者を教える外大とはまた別な，本当に海外の第一線の労働者または中堅の技術者たちに日本語の基礎を教える所です。日本に来て工場研修を受ける人達にわずか100時間だけ日本語を教えて，工場である程度技術を習得してもらう，そういうためにできた研修センターなんです。そこで日本語を本当にミニマムにしぼって教えるということの苦労を講師の先生方の体験を通じて知りました。ここは，寺村先生のプランもあっただろうと思いますが，大阪外大の講師の方もいらっしゃいまして，いろいろアドバイスをなさっていらっしゃいましたが，日本語スタッフを中心にしまして，単に教えるだけでなくて，もっともっといろいろ日本語の深い知識あるいは体系的な知識というものを求めていく，確かめていくということが大事だということで，研究会というものをやっておりました。月1回ほどりっぱな先生方をお招きしてお話

を聞く会を開いていました。本学の名誉教授でいらっしゃいます国語学の池上禎造先生，それから英語学の毛利可信先生にもお運びいただいたことがございます。先程，お話に出ました三上章さんのお話をうかがったこともあります。で，半官半民のセンターとしては非常にアカデミックな雰囲気をもっていたところでありまして，そういうアカデミックな性格ができていったのは，それまでにいらっしゃったいろいろな先生方，特に寺村さんの功績が大きかったのではないかと思います。

現在各国の言語に翻訳されて評判の高い『にほんごのきそ』というシリーズがございますが，これは教師指導書もついておりますし，グロッサリーもついておりますが，これの元版などの企画・立案など寺村先生の発想になるものが多いんじゃないかと思います。また，ここは『研修』という月刊の機関誌を出しておりましたが，それに毎号数ページ「日本語研修の現場から」というページが与えられていました。日本語の先生方の教室作業の中から，あるいは，その延長線上で考えられた小レポートが掲載されてきました。「ようだ」「らしい」「だろう」「みたいだ」の違いとか，各国の人の名前にはどういういわれがある，どういう傾向があるとかいうようなことが載せられました。

寺村先生は2年間の研究を終えて元気に帰って来られました。先生は，先程のお話にもありましたように，非常に人なつっこいところがございました。そして，三上章氏のところに行かれました。本当に大変短い期間でしたけれども，深いつきあいをなさいました。その後筑波に移られてからも，三上さんの郷里が広島県でしたので，広島県に友人と一緒にお墓もうでに行かれたというようなことまでありまして，本当に傾倒し，敬慕されていました。このようなおつき合いは，学者同士，研究者仲間だけのことではございませんでして，本当にそういう友人があちこちにいらっしゃると思います。私が断片的に存じあげているだけでも，例えば，研修協会の斎藤さん，本の出版をなさっていらっしゃいます三友社の中森さん，こういう方とは本当に哲学論議をしたり，人生論議をしたり，社会論議をしたりということで，時間があれば研究の時間を割いてでも親しくお話にうち

興じるというふうな一面がございました。今日こうしてたくさん，この席にお見えになっていらっしゃる中にも，そういう寺村先生との深い御交誼を大切にし，寺村先生との別れがたい別れを告げにいらっしゃった方がたくさんいらっしゃると思います。

私どもは，寺村先生がお帰りになって後，しばらくして，丁度1972年，昭和47年ごろからでございましたけれども，学習研究社の方から大阪外大の方に要請がございまして，吉田弥寿夫先生を中心に専任スタッフ10人が1年近くかけまして『新しい日本語』《Japanese for Today》を作ることになりました。まあ，英語国民用の自習日本語教科書でして，2人ずつ組になりまして，吉田・寺村・佐治・玉村・倉谷・大倉・西出・山口・岡田・春名の10人で作業を始めました。これが大変楽しい場でございまして，オリジナルの，外大で使っておりました《Beginning Japanese》というふうな教科書や《Intermediate Japanese》もございましたけれども，市販するということでございましたので，多角的なニーズに応えるということで，いろいろ工夫もいたしました。この編集会議というのは，ちょっとした研究会の様相を呈しておりました。毎回楽しい会議でございました。ただ，これができましたのが，1973年，昭和48年の秋口でございました。丁度その頃，お互いに誰も知らなかったんですが，同時進行しておったことがあります。その頃佐治先生は学部の方の国語学の担当に移籍されていらっしゃったんですけれども，大阪女子大学の方から移籍の話があり，私の方にも非常勤で行っておりました同志社大学の方から丸ごと移ってほしいということがございました。それがたまたま同じ時に決まりまして，1974年の春に2人とも動くということになりました（佐治先生の方は外大の事情で，半年遅くなりました)。これは寺村先生には大変ショックだっただろうと思いますけれども，人事に関わることでございましたので，責任者以外にはお話をしていませんでした。本決まりになって，寺村先生にお話した時は，「そうですか …。」とおっしゃったきり，あまり何も言われませんでした。大変力を落とされたんじゃないかというふうに思われます。

しばらくしまして，大阪外国語大学の大学院に日本語学科が設置されま

して，それで，私もお手伝いに行っておりました。ある時，寺村先生から，「ちょっと相談があるんだけれども」ということで呼び止められまして，それで，相談を受けたんですが，その時，寺村先生は非常に深刻な面持ちでして，実は大阪大学の方で日本学充実のために講座増設を申請する，それで，名前を貸してくれと言われているということでした。名前を貸してくれということは，申請がパスすれば移籍するということですから，ま，大阪外国語大学を離れるということになりますので，寺村先生は，大変，重大なことに考えていらっしゃいました。当然でありまして，私が出て行き，佐治先生が出て行かれまして，その後に若い方がいらっしゃったことはいらっしゃったんですけれども，寺村先生は正にその大黒柱のような存在でございました。「どうだろうか」ということをおっしゃったんで，私は自分が先に出て行ったので，個人的には先生は残って下さるのが一番いいと思うけれども，それは身勝手過ぎることですから，率直に言ってこれは寺村先生が自由な意志で選択，決定なさるのが一番いいというふうに申し上げました。ま，それは不発弾に終わりまして，その後，1979年に筑波大学の方に移られることになりました。それは，ま，筑波の方で大学の新しい学科作りに献身されるという，御希望や御抱負があったことだろうと思います。実は，その前，お母様が高齢で御病気でございまして，大変御家族が御苦労なさっておりました。寺村先生と，それから特に奥様には，本当に御苦労が多かったと存じます。というのも，お母様のお世話を寺村先生がずっとなさってまして，そのお母様が東京の方の御兄弟のお家に移られてからお亡くなりになりました。確か筑波の方にお移りになったのはその後だっただろうと思いますが，筑波大学では新しい学科作りに随分御努力があったと思います。

そして，筑波大学にいらっしゃってからは，お仕事・御活動の範囲も拡がり，随分お忙しくなられたようでして，先生はよく夜更かししながら論文を書かれたんだろうと思います。私はすぐに眠気に襲われる方ですけど，寺村先生は，ここで寝てしまったらもうだめだ，と思ってまた勇気を奮い起こして起き上がってやるんだということを外大ではよくおっしゃってま

したけれども，ま，そういう御無理が，ひょっとして体の方に大きな負担を強いるということになったんではないかと思います。

しかし，寺村先生があちこちの講師を引き受けられ，会合にいろいろお運びになったのは，実は，弟子の勤め先を開拓するためでした。顔を広げておかなければならないんだ，ということをおっしゃっていました。非常に弟子思いでありまして，かつ，学会の事業などにも，あまり欠席されずに本当に献身的にあたってこられたというふうに思います。関西におりますと，あまりそういうことを直接肌身で感じることはないわけですけれども，首都圏にお住まいの研究者は，本当に，日本語教育とか日本語が脚光を浴びるようになりまして，負担がとても大きくなってきていたようです。そういう中で，寺村先生は本当に尊い犠牲になられたんじゃないかというふうに思います。

1985年，丁度今から5年前のことですけれども，11月の中頃に，私に一度集中講義に来てくれというお話がありました。それで，1週間ばかり筑波に出向きました。その時は，初めて寺村先生のお宅にお招きを受けまして，御馳走になりました。それから，休みの日には，奥様の運転で筑波山まで連れて行っていただきました。筑波山に行きますと，ガマの膏というのを売っておりまして，寺村先生が，「これは珍しい。軍中膏，ガマの油だからお土産にどうですか。」と私に買って下さいました。お宮さんのところまで行きましたらば，丁度剣道の奉納試合をやっておりまして，「息子が剣道をやっている。これは一緒に連れて来たらよかったなあ。」とおっしゃってました。筑波の一帯は，古くから開けたところのようでありまして，歌垣（嬥歌）をやった跡があるので，案内しよう，と言って，お宮さんの裏の方を登って行きました。寺村先生はやっぱり汗をぬぐっておられました。少し平坦なところに出ますと，幔幕なんかが引いてありました。そこが，昔「新治　筑波を過ぎて　幾夜か寝つる」という，あの，古事記にも出ております歌の舞台であったと教えてもらいました。その日，帰りに，つくばセンターのテラスのところでベンチに腰掛けながら1時間ばかり夕焼けの空を仰ぎながら，日本語学の話や，あるいは大阪大学に新しい

学科が増設される話などをしました。今，思いますに，筑波大での集中講義の数日，とりわけつくばセンターでお話した，あの時間が，いちばん寺村先生とゆっくり，いろいろなことが話し合えて，なつかしい，忘れがたいものでございます。その後，寺村先生がお倒れになりました。寺村先生が上野駅で倒れられた，ということを聞いてたいへん驚きました。ぜんたい，寺村さんは，いろいろ細かいところに温かい気づかいをされる先生でした。人間，もう少し野放図で鷹揚であったら，こんなに早くお別れをすることにはならなかったんじゃないかと思われまして，残念でなりません。

そのあと，寺村先生は絶対安静ということでございましたけれども，日に日に健康を回復されまして，1988年にこちらの大阪大学の方にお移りになりました。大阪大学にいらっしゃってからも，私が時々講義をしている日に，早く出かけて来られてお話をすることがございましたけれども，あまり長時間お話するということはございませんで，たいてい，お手紙か電話で用件をすませるだけでございました。1988年の春，４月，京都外国語大学で日本語教育学会の研究例会が催され，その後，懇親会を近くのピザ・ショップでいたしました。その時は，少しゆっくりお話ができました。そして，実は，88年の７月に中国の日本語教育学会の方から，「シンポジウムをやるので寺村さんと玉村さんを呼びたい，奥さん同伴でおいで下さい」ということで，寺村先生は，これに大変乗り気でいらっしゃったようで，私もそれだったら一緒にと思っていたんですけれども，直前にそれぞれの方に事情が生じまして，参れなくなりました。それで，代わりに徳川先生と仁田先生が上海に行かれるということになりました。先程もお話していたんですが，もし，これ，行ってらしたら，暑い炎天の中国でとても御健康にさわったのではないか，というふうに思います。代わりに行って下さった先生方には悪いんですけれども，これは御一緒しなくってよかったのではないかという気がします。

そのあと，寺村先生とは葉書のやりとり，手紙のやりとり，電話でお話するというだけでございました。昨年私は丁度秋口に４日か５日続けてこちらで講義をするということがございましたけれども，その時も丁度お体

の方が悪くって，初夏のころの御病気はお治りだったんですけれども，また調子が悪いということで，入院中でいらっしゃいました。こういうことで，あと，御退院になりましてから葉書をいただいたり電話でちょっと一言二言お話したりということだけになってしまいました。

寺村先生は，言語についても非常に執念深いと言っていいぐらい，集中力と言いますか強い関心をいつも持っていらっしゃいました。私もその点では同じように負けず劣らずだと思うんですけど，この点については寺村先生には兜を脱がなければしかたがないと思います。まあ，その分，時々コロッと忘れられる時がありまして，私もこの頃コロッと忘れることが増えてきたんですけれども，あのー，寺村先生，「今日は会議だった。」この「た」というのは発見の「た」と言うんですが，まあ，寺村先生はわりあいそういうことがあるんですけれども，しかし，言語について，この，気になることというのは，いいかげんにせずに徹底的に，たずねるとか考えるとか調べるとか。えー，これはフランス語では言いますかとか，これはどういう意味ですかとか，中国語だったらどうだとか，というふうなことを私もたびたび聞かれました。学生諸君もそういうふうに聞かれたんだろうと思います。このことが単に，あのー，関心というだけでなくて，いろいろ体系化され，また，教材という形で具体的に活かされるということになったと思います。

それから，先程申しましたように非常に友情に篤い方です。いろいろな方に深いおつきあいをなさる。で，それから気性が非常にお優しくって，対立的感情というのを持たれるというのが大変お嫌であったようです。万事ソフトに人に接するという優しいところがあったというふうに思います。そして，弟子思いである。それから，あの，また，こう，温かくって，健康なほのぼのとした，そういう雰囲気が好きで，貧しくても『名も無く貧しく美しく』という，そういう映画がございましたけれども，寺村先生，山本周五郎の書き物の世界がたいへんお好きでして，『青べか物語』なんか，よく読んでおられました。浦安のあたりとか，ああいうところを舞台にした庶民の温かい心の交流がある，そういうところがお好きでいらっし

ゃったようです。そういう先生がまだまだ本当に研究したいと，あるいは後進を指導したいと，御家族のことも強く心にあったことでしょう。いろいろなことが中途のままで，他界されてしまいまして，さぞや無念の思いでいらっしゃることだろうと思います。

寺村先生と私は，1966年，67年頃からのおつきあいでございました。そしてまた，ある時は少し離れたところから，ある時は非常に近いところから寺村先生をながめ，また，先輩として後についていくという立場でございましたけれども，寺村先生の偉大な業績と，それから温かいお人柄というのは，我々の脳裏から永久に消えることはないと思います。

大変断片的で寺村先生の思い出とは言えないと思いますけれども，これでお話を終わらせていただきます。最後に私ちょっと，寺村先生の御仏前に3首ほど，挽歌を詠んでおおくりいたしました。そのうちの1首を御披露して私の思い出の結びにしたいと思います。

ことのはの　学びにかけし　命いま
　　み空にありて　子らを見守る

ありがとうございました。

（同志社大学文学部教授）

【付記】

以上の文章は，1990年5月12日にとり行われた『寺村秀夫先生を偲ぶ会』において，「寺村秀夫先生の思い出」と題してお話しいただいたものである。

（編集部記）